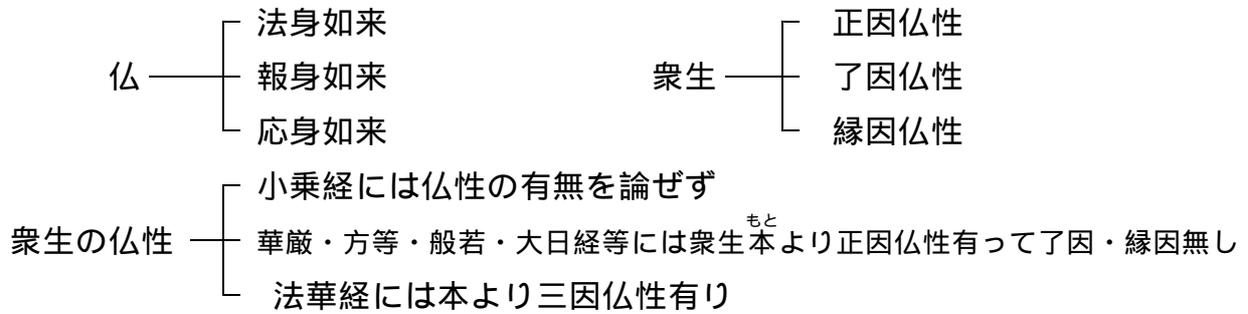


八宗違目抄

文永九年二月一八日 五一歳

記の九に云はく「若し其れ未だ開せざれば法報は迹に非ず、若し顕本し已はれば本迹各三なり」と。文句の九に云はく「仏三世に於て等しく三身有り、諸教の中に於て之を秘して伝へず」と。

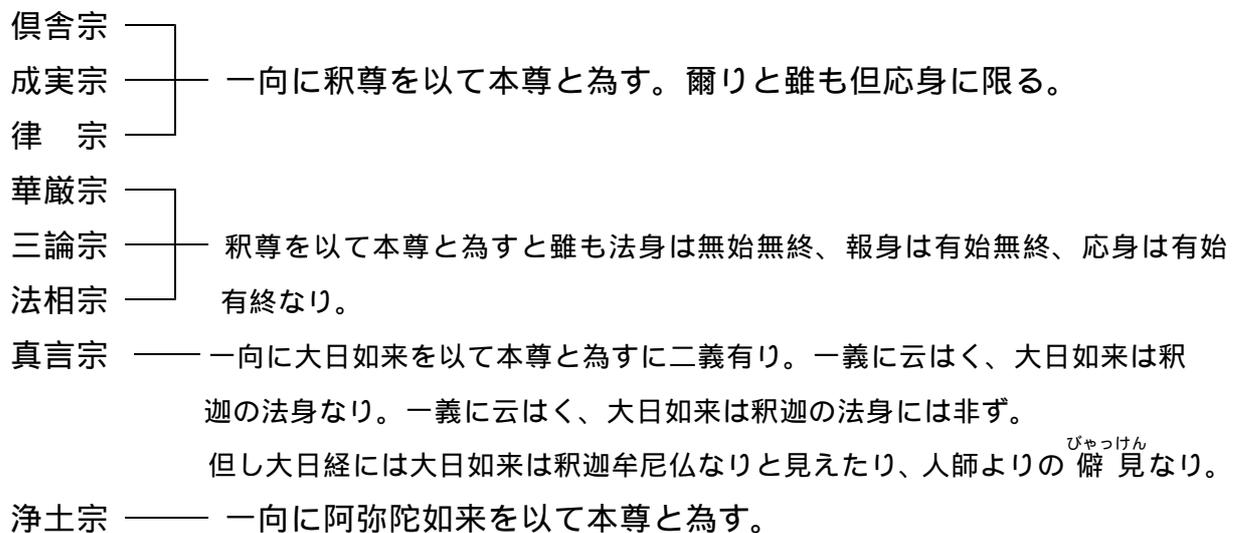


文句の十に云はく「正因仏性は<sup>法身の性なり</sup>本<sup>つうこう</sup>當に通亘す。縁了仏性は種子本有にして今に<sup>はじ</sup>適むるに非ざるなり」と。法華經第二に云はく「今此の三界は皆是我が有なり」<sup>主・國王・世尊なり</sup>「其の中の衆生は悉く是吾が子なり」<sup>親父なり</sup>「而も今此の<sup>げんなん</sup>処は諸の患難多し。唯我一人のみ能く救護を為す」<sup>導師</sup>。寿量品に云はく「我も亦これ世の父」文。



五百問論に云はく「若し父の寿の遠きを知らざれば復父統の邦に迷はん。<sup>いたずら</sup>徒に才能と謂ふとも全く人の子に非ず」と。又云はく「但恐らくは才一國に当たるとも父母の年を識らざらんや」と。

古今<sup>ここんぶつどうろんこう</sup>仏道論<sup>道宣の作</sup>衡<sup>の</sup>に云はく「三皇已前は未だ文字有らず。但其の母を識つて其の父を識らず。禽獸<sup>きんじゅう</sup><sup>鳥等なり</sup>に同じ」等云云<sup>慧遠法師周の武帝を語る語なり</sup>。



法華宗より外の真言等の七宗並びに浄土宗等は、釈迦如来を以て父と為すことを知らず。例せば三皇已前の人禽獸きんじゅうに同ずるが如し。鳥の中に鷓鴣しょうりょうちよう鳥も鳳凰ほうおうちよう鳥も父を知らず。獸けものの中には兔も師子も父を知らず。三皇已前は大王も小民も共に其の父を知らず。天台宗よりの外真言等の諸宗の大乗宗は師子と鳳凰しょうりょうの如く、小乗宗は鷓鴣しょうりょうと兔等の如く、共に父を知らざるなり。華嚴宗に十界互具一念三千を立つること澄觀しょうかんの疏に之有り。真言宗に十界互具一念三千を立つること大日經の疏に之を出だす、天台宗と同異如何。天台宗已前にも十界互具一念三千を立つるや。記の三に云はく「然るに衆積あつを攢むるに、既に三乗及び一乘さんいち三一俱に性相等の十有りと許す。何すれぞ六道の十を語らざるや」此の積の如くんば天台已前五百年の人師三藏等の法華經に依る者一念三千の名目を立てざるか。

問うて云はく、華嚴宗は一念三千の義を用ひるや華嚴宗は唐の則天皇后の御宇に之を立つ。 答へて云はく、澄觀しんしょうの疏ほつ三十三ほ清涼だいいしん園いんに云はく「止觀の第五に十法成乘を明かす中の第二に真正しんしょう發菩提心ほつ 釈して曰く然も此の經の上下の發心の義は文理淵博なれども、其の撮略を見る。故に取つて之を用ひ、引きて之を証とす」と。二十九に云はく「法華經に云はく、唯仏与仏等と。天台云はく 便ち三千世間を成すと。彼の宗には此を以て実と為す 一家の意、理として通ぜざる無し」文。

華嚴經に云はく旧訳には功德林菩薩之を説くと、新訳には覺林菩薩之を説くと、弘法には如来林菩薩と引く「心は工たくみなる画師の種々の五陰ごおんを画くが如く一切世間の中に法として造らざること無し。心の如く仏も亦爾なり、仏の如く衆生も然なり、心と仏と及び衆生と是の三差別無し。若し人三世一切の仏を了知せんと欲せば当に是くの如く觀ずべし。心は諸の如来を造る」と。

法華經に云はく此は略開三の文なり 仏の自説なり「所謂諸法とは、如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等なり」と。又云はく「唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したもう。諸仏世尊は衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」と。

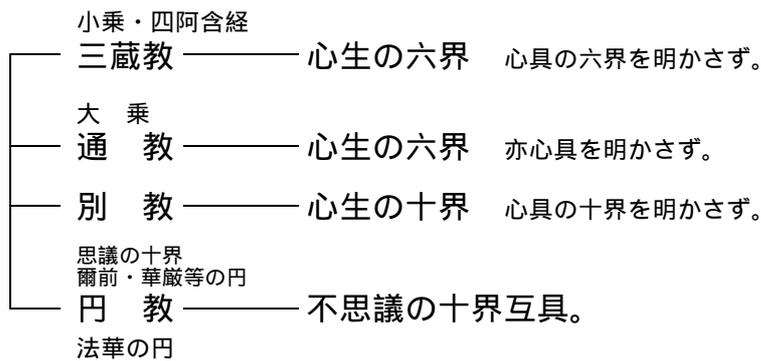
蓮華三昧經に云はく「本覺心、法身常に妙法しんれんだいの心蓮台このかたに住して、本より來 三身の徳を具足し、三十七尊しんじょう金剛界しんじょうの三十七尊しんじょうに住したまへるを歸命したてまつる。心王大日遍照尊しんのう、心数恒沙しんじゆごうじゃ、諸の如来も普門塵数じんじゆ、諸の三昧、因果を遠離して法然として具す。無辺の徳海本より円満、還つて我心の諸仏を頂礼す」と。仏藏經に云はく「仏、一切衆生心中に皆如来いま有して結跏趺坐けっかふざすと見そなわす」文。

問うて云はく、真言宗は一念三千を用ひるや。答えて云はく、大日經の義釈善無畏・金剛智・不空・一行に云はく此の文に五本有り十卷の本は伝教・弘法之を見ず智証之を渡す「此の經は是法王の秘宝なり、妄りに卑賤の人に示さず。釈迦出世して四十余年、舍利弗の慇懃なる三請に因りて、方に為に略して妙法蓮華の義を説きたまひしが如く、今此の本地の身、又是妙法蓮華最深の秘處なるが故に寿量品に云はく「常在靈鷲山・及余諸住处・乃至我浄土不毀・而衆見燒尽」と、即ち此の宗の瑜伽ゆが

の意ならくのみ。又補処の菩薩の慇懃三請に因って方に為に之を説けり」と。又云はく「又此の經の宗は横に一切の仏教を統ふ、唯蘊無我、出世間心、住於蘊中と説くが如きは、即ち諸部の小乗三蔵を撰す。蘊の阿頼耶を觀じて自心の本不生を覺ると説くが如きは、即ち諸經の八識・三性・無性の義を撰す。極無自性心と十縁生の句を説くが如きは、即ち華嚴・般若の種々の不思議の境界を撰して皆其の中に入る。如実知自心を一切種智と名づく」と説くが如きは、即ち仏性涅槃經・一乗法華經・如来秘藏大日經皆其の中に入る。種々の聖言に於て其の精要を統べざること無し」と。毘盧遮那經の疏傳教・弘法第七の下に云はく「天台の誦經は是円頓の数息なり」と謂ふ是此の意なり。

大宋の高僧伝卷の第二十七の含光の伝に云はく「代宗、光を重んずるこ玄宗・代宗の御宇に真言不空わたる。含光は不空三蔵の弟子なり。不空を見るが如し、勅委して五台山に往いて功德を修せしむ。時に天台の宗学湛然妙楽、天台第六の師なり禅觀を解了して深く智者天台の膏腴を得たりと。嘗て江淮の僧四十余人と清凉の境界に入る。湛然、光と相見えて西域伝法の事を問ふ。光の云はく、一国の僧空宗を体解する有りと。問うて知者の教法に及ぶ。梵僧云はく、曾て聞く、此の教邪正を定め偏円を曉り、止觀を明かして功第一と推す。再三光に囑す。或は因縁あつて重ねて至らば、為に唐を翻じて梵と為して附し来たれ。某願はくは受持せんと屢々手を握つて叮囑す。詳らかにするに其の南印土には多く竜樹の宗見を行ずる故に此の流布を願ふこと有るなり」と。菩提心義の三に云はく「一行和上は元是天台一行三昧の禅師なり能く天台円満の宗趣を得たり、故に凡そ説く所の文言義理、動もすれば天台に合す。不空三蔵の門人含光、天竺に歸るの日、天竺の僧問はく、伝へ聞く、彼の国に天台の教有り」と。理致須ゆべくば、翻訳して此の方に将来せんや云云、此の三蔵の旨も亦天台に合す。今或阿闍梨の云はく、真言を学せんと欲せば、先づ共に天台を学せよと。而して門人皆瞋る」云云。

問うて云はく、華嚴經に一念三千を明かすや。答えて云はく「心仏及衆生」等云云。止觀の一に云はく「此の一念の心は、縦ならず横ならず不可思議なり。但己のみ爾るに非ず、仏及び衆生も亦復是くの如し。華嚴に云はく、心と仏と及び衆生と是の三差別無しと。当に知るべし己心に一切の法を具することを」文。弘の一に云はく「華嚴の下は引いて理の齊しきことを証す。故に華嚴に初住の心を歎じて云はく、心の如く仏も亦爾なり、仏の如く衆生も然り。心と仏と及び衆生と是の三差別無し。諸仏は悉く一切は心に従つて転ずと了知したまへり。若し能く是くの如く解すれば、彼の人真に仏を見たてまつる。身亦是心に非ず、心も亦是身に非ず、一切の仏事を作すこと自在にして未曾有なり。若し人、三世一切の仏を知らんと欲求せば応に是くの如き觀を作すべし。心、諸の如来を造すと。若し今家の諸の円文の意無くんば、彼の經の偈の旨、理として実に消し難からん」と。



止の五に云はく「華嚴に云はく、心は<sup>たく</sup>工<sup>えし</sup>みなる<sup>ごあん</sup>画師の種々の五陰を造るが如く、一切世間の中に心より造らざること莫しと。種々の五陰とは前の十法界の五陰の如きなり」と。又云はく「又十種の五陰、一々に各十法を具す。謂はく、如是相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等なり」文。又云はく「夫一心に十法界を具す。一法界に又十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば、百法界には即ち三千種の世間を具す。此の三千、一念の心に在り」文。弘の五に云はく「故に大師、<sup>かくいさんまい</sup>覺意三昧・<sup>かんじんじきぼう</sup>觀心食法及<sup>じゆきょうぼう</sup>び誦經法・小止觀等の諸の心觀の文に、但自他等の觀を以て三仮を推せり、並びに未だ一念三千具足を云はず。乃至觀心論の中に、亦只三十六の問ひを以て四心を責むれども、亦一念三千に<sup>わた</sup>渉らず。唯<sup>しねんじよ</sup>四念処の中に、略して觀心の十界を云ふのみ。故に止觀に正しく觀法を明かすに至って、並びに三千を以て指南と為せり。乃ち是<sup>しゅう</sup>終窮究竟の極説なり。故に序の中に、説己心中所行法門と云ふ。良<sup>まこと</sup>に以有るなり。請ふ、尋ね読まん者心に異縁無かれ」と。止の五に云はく「此の十重の觀法は横豎に収束し微妙精巧なり。初めは則ち境の真偽<sup>えら</sup>を簡<sup>なかご</sup>び、中<sup>えら</sup>は則ち正助相添ひ、後は則ち安忍無著なり。意<sup>こころ</sup>円かに法巧みに該括<sup>がいかつしゅう</sup>周備<sup>び</sup>して初心に規矩<sup>きく</sup>たり。將に行者を送して彼の薩雲に到らしむ<sup>初住な</sup>り。闍証<sup>あんじょう</sup>の禪師・誦文の法師の能く知る所に非ざるなり。蓋し如来積劫の懃求したまへる所、道場の妙悟したまへる所、身子の三たび請する所、法譬の三たび説きたまふ所、正しく茲に在るに由るか」と。弘の五に云はく「四教の一十六門乃至八教の一期の始終に遍せり。今皆開顯して束<sup>つか</sup>ねて一乗に入れ、遍く諸教<sup>くく</sup>を括りて一実に備ふ。若し当分を者、尚偏教の教主の知る所に非ず。況んや復世間暗証の者をや 蓋し如来の下は称歎なり。十法は既に是法華の所乗なり、是の故に還って法華の文を用ひて歎ず。迹の説は、即ち大通智勝仏の時を指して以て積劫と為し、寂滅道場を以て妙悟と為す。若し本門に約せば、我本行菩薩道の時を指して以て積劫と為し、本成仏の時を以て妙悟と為す。本迹二門只是此の十法を求め、悟るなり。身子等とは、寂道にして説かんと欲するに物の機未<sup>もつ</sup>だ宜<sup>いま</sup>しからず、其の苦に墮せん事を恐れて、更に方便を施す。四十余年種々に調熟し、法華の会に至って初めて略して権を開するに、動執生疑して<sup>おんごん</sup>慙慙に三請

す。五千起ち去って方に枝葉無し。四一を点示して五仏の章を演べ、上根の人に被るを名づけて法説と為し、中根は未だ解せざれば猶譬喩を憐ひ、下根は器劣にして復因縁を待つ。仏意聯綿として茲の十法に在り。故に十法の文の末に皆大車に譬へたり。今の文の憑る所、意此に在り、惑者は未だ見ず。尚華嚴を指し、唯華嚴円頓の名を知って而して彼の部の兼帯の説に昧し。全く法華絶待の意を失ひて妙教独顕の能を貶挫す。迹本の二文を駮べ五時の説を檢ふれば円極謬らず、何ぞ須く疑を致すべけん。是の故に結して、正しく茲に在るかと言ふ」と。又云はく「初めに華嚴を引くことを者、重ねて初めに引いて境相を示す文を牒す。前に心造と云ふは即ち是心具なり、故に造の文を引いて以て心具を証す。彼の経第十八の中に、功德林菩薩の偈を説いて云ふが如く、心は工みなる画師の種々の五陰を造るが如く、一切世界の中に法として造らざること無し。心の如く仏も亦爾なり、仏の如く衆生も然なり、心と仏と及び衆生と是の三差別無し。若し人三世の一切の仏を知らんと欲求せば、応に是くの如く觀ずべし。心は諸の如来を造ると。今の文を解せずんば、如何ぞ偈の心造一切三無差別を消せん」文。

諸宗の是非之を以て之を糾明すべきなり。恐々謹言。